
Innocent RABBIT

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I n n o c e n t R A B B I T

【Nコード】

N 7 6 5 6 N

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

生物兵器として造られたクローン人間、生体コードR A B B I T。医学生の手は担当主治医として、彼の生体研究をすることになる。

実験体として生きてきた彼はあまりに無垢で、手はやがて彼に惹かれていく。それが兵器としての彼を覚醒させることになるとは、二人は気付いていなかった……。近未来ファンタジーです。

第一話（前書き）

今までの現代モノとかけ離れてみました。
基本テーマは恋愛でいきたいと思います。
楽しんでいただけたら幸いです。（^^）

第一話

真っ白な無菌室。

点滴液をぶら下げた大きな白いベッドが部屋の中央にあるだけの何も無い部屋。

白いベッドには血圧計やら、脳波計やら、あらゆる機能が内蔵された最新の機械が設置されている。

そのベッドには、体中にチューブが配線されて寝かされている青年がいた。

私は恐る恐るベッドに近づき、そうつと彼の寝顔を見た。

色素がないみたいに真っ白なきれいな人だ。

整った顔に銀色の髪がかかっている。

あたしは心の中で呟いた。

「初めまして、RABBIT。」

「ミス サヤカ。彼がこれから君が担当する実験体だ。生体コードはRABBIT。長い付き合いになるかもしれないからよく見ておきなさい。」

突然呼ばれて、私は飛び上がった。

いつの間にか無菌室に入ってきたブライアン教授だ。

宇宙服のような真っ白な白衣を全身に纏い、眼鏡を掛けた青い眼だ

けが顔に空いた穴から覗いている。
あたしは日本式に頭を深く下げた。

「はい、まだ、インターンのわたしが選ばれて、担当できることを誇りに思います。推薦して頂いたブライアン教授に恥をかかせることのないよう頑張ります。」

ブライアン教授は眼鏡の奥の瞳を細めて笑った。

「そんなに気負う必要は無い。何も君に彼を解体してもらおう訳じゃない。実験体の毎日のヘルスチェックとレポートの提出さえしてもらえばいいんだ。飼育係になったつもりで気楽にやってくれ。」

「いえ、それでも選んで頂いた以上全力で取り組みます。」

私は生真面目に返答した。

「その真面目さは君のいいところだ。期待してるよ。」

ブライアン教授は肩をすくめて無菌室を出て行った。

無菌室に実験体と一人残された私は、彼の観察の続きを始めた。
見かけは普通の人と変らない。

頭に巨大なヘルメットのような脳波計をつけられ、両手は十字に広げられ、手錠で固定されている。

胸までシャツが掛けられている裸体には所狭しとチューブが貼り付

けられ機械部品の配線のような。
点滴液はおそらく麻酔だろう。

これから彼は私の研究課題になり、彼にとって私は担当主治医になる。

同じ人に見えて彼は人間ではない。
彼を実験体として、自分は研究者として冷静に観察しなければなら
ない。

私はマニュアル通りにそう思い込んでいた。

その時、突然彼の目が開いた。
赤い、うさぎのような瞳だった。
私はぎよっとして後ずさる。

彼は動いた私に気づき、赤い目でぼんやり私を見た。
びつくりするほどきれいな顔だ。

生体コードがR A B B I Tの意味が分かった。

銀髪が掛かった真つ白な顔に赤い瞳は雪山の白兔を連想させた。
彼はしばらく私をぼんやり見ていたが、まだ麻酔が効いているのか、
また目を閉じると眠ってしまった。

子供のような安らかな寝顔。
彼が生物兵器として造られたクローン人間だとは、その時の私には
思えなかった。

第2話

今日は実験体RABBITの観察開始の日だ。

私は更衣室で白衣に着替えながら今までの一連の成り行きを思い返していた。

医学部の私にブライアン教授から直々に依頼が来たのはたった一週間前のことだ。

医学部の講義は続けること。

それ以外の講義は全て免除。実験体の観察、研究に専念すること。その記録は単位として認められること。

結果次第で、類似ケースの研究チームのメンバーに抜擢されること。メンバーに入れば医学部の授業料は全て免除されること。

ブライアン教授は私が今回の担当研究員に抜擢されたことを告げ、とりあえずおいしい所だけ端的に説明した。嬉しい反面、何故実績もない私が抜擢されたのかよく分からなかった。

「君の前向きな姿勢が選考員に気に入られたんだよ。頑張ってくれたまえ。」

白いあごひげに覆われた顔に眼鏡を乗せたブライアン教授は、ヨーロッパ系民族らしくウインクして見せた。

「だが、くれぐれも気をつけてくれ。」

あたしの脳裏に教授の言葉が蘇る。

私は長い黒髪をまとめて白い帽子を被った。

「RABBITは人間ではない。生物兵器だ。本気になれば、君だけでなくこの施設全体を破壊する能力を持っている。」

あたしはピッチリ張り付くゴム手袋を両手にはめる。

何故、そんなに危険な実験体をあたしのような学生に担当させることになったのか？

懸念する部分は大いにあった。

だが授業料免除と、研究員としての進路が約束されることは魅力的だったし、何よりクローン生物は私の研究テーマだった。

クローン技術は23世紀の今、もはや開発しつくされている。

自分のクローンを移植用に保存してあるクローンバンクなるものも存在する。

だが、今でも倫理的にクローン人間は大いに語られる話題ではない。ましてや生物兵器として開発されたクローン人間など国家機密だ。まだ卒業もしてない私が本物のクローン人間に接触を持てるなんて科学者としては夢のような話だった。

どんな理由で抜擢されたとしても、結局この話は受けただろう。

真っ白な白衣になった私は、無菌室の扉の前に立った。
身分証明書をスキャンし、パスワードを打ち込む。
白い扉が左右に開いた。

昨日と同じ、大きなベッドがあるだけの部屋。

だが昨日と違うのは、寝かされている実験体の彼が赤い目をぱつち
り開けてこちらを見ている。

昨日と同じように手錠で固定されているが、どうやら麻酔はされて
いない。

目が合って、私はぎよっとした。

突然襲われたらどうする？

生物兵器とは聞いているが、具体的にどんな能力があるのか情報は
一切与えられていなかった。

本気になればこんな手錠壊してしまうかも・・・。

だが、科学者としてのプライドが私を踏み留まらせた。
勇気を振り絞り、真っ直ぐ彼のベッドに向かう。
彼は赤い目であたしを凝視している。
私の鼓動が早まった。

こ、殺されませんように・・・！！！！

先に声を掛けたのは意外にも彼だった。

「あなたは新しい先生？」

良く通る、男性にしては高い声だ。

「え？そ、そう。あ、あたしはサヤカ オキノ。23歳日系人よ。これからあなたの担当することになりました。よろしく願います。」

完全に私は動揺して、一方的に自己紹介するといつもの癖で頭を下げた。

不思議なものでも見るような目つきをして、彼は私をベッドから見上げた。

「サヤカが名前？日系人て？」

「に、日系人ていうのはご先祖が日本という国で生まれた人達のこと・・・かな？今はもう無い国だけだね。」

想定外の質問に私はかなり適当な返事をする。
だが、全くの嘘でもない。

23世紀の今、私のご先祖様の国 日本はもう存在していない。

「ミス サヤカは物知りだね。ぼくはここから出たことがないからよく分からないけど。」

彼は感心した顔をする。

素直な人だ。

その間も彼の赤い目は私を凝視したままだ。
何と言うか視線に遠慮がない。

好奇心を抑えられない子供がじーっと見つめるアレに似ている。

「でも、ぼくは人間ではないしそんなに緊張しないでいいよ。」

目を逸らさずに彼は言った。

人間ではない・・・。

確かにそう思うように言われてきた。

私情が入ると科学者として冷静な判断ができなくなるからだ。

モルモットや犬の実験動物には何度も接してきた私だが、実験人間に逢ったのは初めてだ。

この場合、どんな態度で接するのが正しいのか。

目の前にいる彼は兵器だろうと、実験体であろうと、少なくとも見かけは限りなく人間だった。

彼は赤い目で沈黙している私を見つめている。

私の出方を伺っているのか。

私は腹をくくった。

「あなたは動物には見えないわ。だから人間と見なします。これからよろしく。」

彼はきよとした顔をする。

どうやら深い意味はなかったらしい。

だが、私が友好的に歩み寄ったことは理解したようだ。につこり笑って私に応えた。

「よろしく、ミス サヤカ。ぼくは名前はないけど、今までの先生にはラビって呼ばれてた。これでも20歳です。」

この施設を破壊できる能力を持つ生物兵器。
彼の素顔はあまりに無垢な子供だった。

第3話

ぎくしゃくした互いの自己紹介を終え、私はまずノルマのヘルスチェックアップの記録を取る。

とは言っても、私が実際手を触れてすることは殆どない。

彼の体に配線されたチューブが正確に彼の体内情報をコンピュータに送り、データはその場でプリントアウトされる。

私はそのデータを読み、彼の体調不良、変化を記録する。変化があれば、本部に連絡、体調がよければそれだけだ。

万全の環境対策をしている筈なので、彼の体調が変化することは恐らく皆無に等しいだろう。

「身長175cm、体重60Kg、血圧120・60 体温36・3。血糖値は昨日のデータより少し高いね。ラビ、いつ食事してるの？」

私は主治医の顔になってデータを読む。
ベッドに磔にされたままラビは私の言う事をじっと聞いていた。

「・・・食事は7時と12時と18時。昨日データ取った先生より、サヤカは早く来たからじゃないかな？」

なるほど。

私は顔を上げた。

彼はヘルスチェックの時だけ、研究員に危害を加えないようにこうやって自由を奪われているが、当然ながらもこの状態では無い。実験体の彼にも日常がある。

「いつもは何してるの？」

私は彼の私生活に興味を持った。

まだ、医学生の際は研究所の実態を見たことがなかったのだ。

「いつも？部屋にいて、絵本を読んてる。」

・・・絵本？

20歳の成人男性が絵本を読んてるとはどういうことだろう？
メンタル訓練でもしているのか？

「ラビ、私もあなたの部屋に遊びに行ってもいい？」

興味を持った私は子供に語るように聞いてみた。

ラビはきょとんとした顔をしていたが、やがて嬉しそうに赤い目を輝かせた。

「いつでも来てよ。ぼくの絵本読んでくれると助かる。ぼくは字が読めないから。」

私はそれを聞いて殴られたようなショックを受けた。

人権が認められていない実験体に教育がされる筈ない。

彼はこの歳になっても字も読めないので、絵本を見て楽しむしかないのだ。

無垢な表情、子供っぽい仕草や話し方の理由がやっと分かった。

彼の精神は20才ではない。

私の目が熱く潤んでくるのが分かって、慌ててデータに目を落とす。私情は禁物だ。

「じゃ、じゃあ、血液取らせてもらって今日はおしまい。ちょっと痛いわよ。」

私は涙を悟られないように、注射器を出しておどけて見せた。

「いいよ。慣れてるから。」

ラビは笑いながらされるがままになっていた。

彼の白い腕から真つ赤な液体が注射器の中に入っていく。

私と同じ色の血が流れている同じ人間。

私は何故かせつなさで胸が締め付けられた。

彼の屈託の無い瞳はその時もまっすぐに私を見ていた。

第4話

それから私は、大学の講義が終わるとラビの元に通った。

私に課せられたノルマはヘルスチェックだけだったが、面会に時間制限があるわけでもなかった。

私のクローン人間の研究に彼を使っても良いことになっていたので、この機会に貴重な生物兵器を観察させてもらおうと思っていた。

相変わらず、面会の時には彼はベッドに磔にされ、私に危害を加えないよう自由を奪われていた。

彼がベッドに固定されないと、部屋のドアロックは解除されない。

私が来る時間になると彼は自主的にベッドに横たわり、手錠を掛けられる。

そうしないと私が入ることができないのだ。

時々私が早く到着するとドアが開かないことがある。

そんな時はインターホンで声を掛けて、彼が準備するのを待つ。

最初は私が入るのが迷惑じゃなかうかと思ったが、ラビは心底嬉しそくに歓迎してくれる。

まるで、友達がいない子供が遊び相手を待っているみたいに。

「サヤカ先生。今日は何するの？」

ベッドに横たわってラビは私を見上げる。

何して遊ぶの？といわんばかりだ。

「いつものチェックよ。あと、私の研究も付き合ってほしいな。」

彼はきよんとする。

「何をするの？」

私はベッドの傍らの椅子に腰掛け、彼に微笑んだ。

「少しお話しよっか、ラビ。」

「いいよ。何の話？」

「あなたのこと聞きたいの。あなたはいつからここにいるの？」

ラビは少し考えてから困った顔をした。

「よく分からない。だけど気付いたらここにいた。」

「……じゃ、ここから出たことはある？」

「ない。ぼくはこの建物の外には出たことない。」

「……出たい？」

「……。」

ラビは私を凝視した。

この質問は危険だったか？
やがてラビは口を開いた。

「出なくてもいい。だってサヤカ先生が来てくれるから。」

私の心臓がどきっと鳴った。

「他の先生が言ってた。ぼくは出ちゃいけないって。退屈だったけ

ど今は毎日サヤカが来てくれるからいいや。」

私は何だかせつなくなった。

私にとっては学費免除に釣られて始めた任務だったのに、彼は私が来るのを心待ちにしているのだ。

「サヤカ先生、ぼくの部屋にはいつ来てくれる？」

ラビは子供のように目を輝かせて聞いてくる。

絵本を読んで欲しいのだろう。

「本部の許可を取ってみるわ。お部屋きれいにして待っててね。」

私は横たわっている彼を見下ろし、子供をなだめるように優しく言った。

しばらく会話を続けると分かるのだが、彼の精神年齢は恐らく7歳くらいだ。

実年齢が20歳としても、20年間ずっとここにいた訳ではなさそうだった。

今までどこで何をしてきたのだろう。

そもそも生体コードRABBITについて与えられた情報が少なすぎた。

私はぐるりと部屋を見回す。

真っ白な何も無い部屋だが、四方にカメラが設置されている。

今この時も本部に監視されているのだろう。

私がここに送り込まれたことには何の目的があるのだ？

「ねえ、サヤカ先生。ねえってば！」

突然声を掛けられ、私ははっと我に帰った。

礫にされたままラビが、私を呼ぼうと足だけバタバタさせている。体に掛けられたシャツが跳ね除けられ、チューブが配線された裸体が顕わになる。

真っ白い、きれいな体だった。

だが彫刻のようにしなやかな肢体には当然、生殖器もあるわけで・・・。

「ちよっ、ちよっとラビ！」

私は赤面して椅子から飛び降り、床に落ちたシャツをガバっと掴むと下半身に被せた。

「ねえ、さっきから呼んでるでしょ？」

ラビは臆することなくバタバタしながら喋り続ける。

この人・・・まさか羞恥心もない・・・？

私は彼の顔を愕然として見た。

精神年齢7歳だったら、なくても当然か。

私は一人で赤くなって汗をかいていた。

科学者としてありえないリアクションだ。

実験動物に生殖器があるのは当然だ。

なのに・・・。

実験体のこの人の外見は限りなく人間であり、そして普通の男性だった。

第5話

ラビとの面会が始まってから1月がたった。
今ではお互い打ち解けて、おしゃべりも盛り上がるようになっていた。

彼が舌つ足らずな口調で子供のように一生懸命話すのを、私は学校の先生のように頷きながら聞く。

彼は知識はないが知能は低い訳ではないらしい。

私が話す世界のこと、科学のこと、何にでも興味を持ち質問をする。そして恐ろしい勢いで吸収していく。

部屋に行く約束はまだ本部に許可を取っていないかったが、毎日のお喋りだけでラビは満足しているみたいだった。

だが、相変わらず面会の時は、彼はベッドに磔にされていた。

「ラビも起きて話ができればいいのにね。」

私が漏らした一言がいけなかった。

ラビの赤い目がいたずらっぽく光る。

「サヤカ先生が協力してくれるなら魔法を見せてあげるけど？」

「魔法？」

私は笑って聞き返した。

ラビは首を持ち上げ、四方に設置してあるカメラを顎で指した。

「あのカメラに残像を映すんだ。」

「残像？」

「そう。で、ベッドの裏側に手錠を外すボタンがあるんだよ。それを押して。」

「ラビ、それはできないわよ。規則があるんだから。」

「大丈夫、カメラはずっと同じ映像を写してるから。」

ラビはウィンクして見せた。

そしてカメラをじっと見据える。

彼が集中しているのを、私はただ啞然と見つめていた。やがて持ち上げていた首をがくんと落とした。

「もう、大丈夫だよ。これで、しばらく見つからない。」

私は半信半疑でカメラを見つめる。

「残像がリピートされてるってこと?」

私は恐る恐る聞いた。

「そうそう。だから長い時間だとバレちゃう。早くボタン押して、サヤカ。」

ラビは足をバタバタさせた。

私は何がなんだかよく分からず、言われるままにベッドの下を覗き込んでボタンを押した。

その途端、彼の腕を固定していた手錠が二つに開いた。

「やったあ!」

上半身が自由になったラビはベッドの上でむくつと起き上がった。長い銀髪がさらさらと肩に掛かる。

ラビはベッドから降りて私の前に立った。

初めて二本の足で立つラビを私は呆然と眺めていた。

小柄な私より頭一つ分は大きい。

いつも見下ろしていた白い顔に見下ろされているのが不思議な感覚だ。

「サヤカ先生、ちっちゃい！」

ラビは無邪気にあはは・・・と笑った。

「じゃあ、お礼に魔法見せてあげるね。」

そう言つて、ラビは私が今まで座っていた椅子に手を当てる。

彼の赤い目が光った。

その途端、パン！という音とともに木製の椅子がバラバラに飛び散った。

木材の断片が黒く焼け焦げ、煙が上がっている。

まるで、椅子に雷が落ちたようなそんな碎け方だった。

私は驚いて口も利けないままその場にへたり込む。

ラビは自慢げな顔で言った。

「サヤカ先生、ぼくは壊すのが得意なんだ。」

屈託なく笑う子供のような生物兵器。

それは彼の能力の僅か一部分に過ぎなかった。

第6話

次の日、私はラビの面会に行く前に教授の元に向かった。

昨日の出来事のせいで、私の頭は混乱していた。

昨日ラビが椅子を破壊した時、私は情けないことにそのまま逃げ出してしまった。

生物兵器だと言われてはいたが、こんな話は聞いていない。

確かに彼が本気を出せば施設全体を破壊することも可能だろう。

私なんか虫を殺すより簡単に違いない。

20才の男性の体に7歳の精神を持つ、クローン超能力者。

私は情報として理解はしていたが、それがどういふことなのか把握していなかった。

私には荷が重すぎる。

私は教授の部屋の前に立つと、インターホンのブザーを押した。

「ミス、オキノ。来ると思っていた。入りなさい。」

ドアが開くと、白ひげに覆われたブライアン教授が現れ、私を迎え入れた。

「失礼します。あの・・・私・・・。」

まず、昨日の規則違反のことを謝るべきだろう。

あのまま飛び出したから、ラビがカメラにしたトリックもバレているに違いない。

辞退しなくても、解任されるかも・・・。

俯く私を見てブライアン教授は笑って言った。

「RABBITが怖くなったかね？ミスオキノ。」

私は下を向いたまま頷く。

「・・・私には荷が重いと思います。こんな任務、どうして私が選ばれたんですか？」

「彼を見てわかったと思うが、彼には母親が必要だからだよ。君は若い女性で、責任感とやりがある。彼にはそういう人が必要だからだ。」

ブライアン教授は私に椅子を勧め、自分もソファに腰を下ろした。

「今回のヘルスチェックの仕事は、彼との相性を見るための訓練期間だ。むしろ君の訓練だったんだよ。」

「私の訓練？」

私は訳が分からなくなった。

「彼は兵器だ。いずれ戦地に赴いてもらうだろう。その際に、彼に命令を遂行させるリーダー兼、トレーナーが必要になる。君はそのリーダーに任命される予定になっていた。」

「私が？戦地に一緒に行くってことですか？」

ブライアン教授は笑みを絶やさず話し続けた。

「君は行く必要はない。だが、彼が行くまでの準備をしてもらう。彼は今のところ精神年齢が低い。それは、実際には3年しか生きていないからだ。前の戦争で一度、脳に損傷を受けてから、前の人格は死んだ。それからまた生き直しているんだ。今、彼に必要なのは信頼できる母親のような存在、そして我々に必要なのは彼を自在に操ることができるリーダーだ。」

「その操ることができるリーダーに私を・・・？」

「今のところ適任だと判断されている。RABBITは警戒心が強いから、誰にでも能力を見せる訳ではない。1ヶ月で信頼関係を作ったのは快拳だよ、ミス オキノ。」

私ははっとした。

ラビは私を信頼して見せてくれたんだ。

逃げ出したりして彼もショックだっただろう。

「君達の面会は監視カメラを設置させてもらっているが、もう危害を加える心配もなさそうだから、君に一任してもいい。彼をベッドに拘束するのも止めよう。君が続ける気があるならね。」

「・・・でも、私は彼の信頼を裏切ってしまいました。」

私は俯いて言った。

そうだ、もう続ける資格なんかない。

彼を傷つけてしまった。

「R A B B I Tは君を待ってるよ。行ってやってくれたまえ。」

ブライアン教授はウィンクした。

「え、じゃあ・・・。」

「続けてもらいたい。昨日のことは気にしなくてもいい。規則違反

も水に流そう。」

私は立ち上がると、挨拶もせず部屋を飛び出した。

いつもの無菌室の前で、私はパスワードを打ち込む。

いつものようにドアが開いた。

が、いつもと違うのは、今日の彼は前開きの白いシャツと白いズボンというパジャマのようないでたちでベッドに座り込んでいる。

ドアが開いたのに気付き、彼の白い顔が私を見た。

「ラビ、ごめんなさい。私……。」

言い終わらないうちにラビはベッドから飛び降り、私の元に駆け寄りその勢いのまま私を抱きしめた。

「もう、来ないかと思った。どこにも行かないで。一人にしないでよ、サヤカ。」

私の頭に温かい涙がポタポタ落ちた。

私の頭は彼の胸に押し付けられ、彼の鼓動が聞こえた。

初めて触れた温かい体。

なのに、子供のように泣くこの人はいずれ戦場に行く兵器なんだ。

私は彼を抱き返した。

銀色の長い髪をなでてやる。

「大丈夫。私はあなたというから……。」

この人を守らなくては……。

この時、私は一人で決心した。

そしてあの計画を立てたのもこの時だった。

第7話

それから私達は急速に打ち解けた。

任務であるとか、このプロジェクトの目的であるとか、そんなことより目の前にいるこの純粋な人を何とかしたいと、私は考えた。

戦争の時の外傷で彼の本当の人格が死んだと教授は言ったが、そんなことが有り得るのか私には疑問だった。

有り得るとすれば記憶喪失。

ショックで何年か分の記憶が飛ぶのは、過去にも例がある。

もしくは辛い記憶を忘れる為に他人格が現れたり、幼児に後退する精神の病。

だとしたら、治る余地は充分にある。

心から信頼できる人間と一緒にいて、彼の心を癒すことで回復していく筈だ。

私は、ヘルスチェックだけでなくメンタルの面も診ていくことにした。

「サヤカ、もうすぐぼくの部屋だよ。」

私は呼ばれてはっとして我に帰る。

私達は、ムービングロードに乗って彼の部屋に行く途中だった。

立つてただけで目的地まで勝手に歩道が動いて連れて行ってくれるので、いつもぼんやりとしてしまう。

研究所の許可も取って、私は公式に彼の部屋を訪問することになったのだ。

「う、ごめん。また色々考えてた。」

私は慌てて謝る。

最初に思ったより大柄なラビが、私の顔を覗き込んだ。

サラサラの銀髪が私の顔にかかる。

その髪をかき上げながら、彼は私を睨んでふてくされた。

「サヤカ先生はいつも何か考えてるんだ。ぼくの部屋のことなんてどうでもいいんですよ。」

「そ、そんなことないって。部屋で絵本読んであげるから、ね。」

彼はそれを聞いて心底嬉しそうに笑った。

「たくさんあるよ。ねえ、タジュウジンカクって何？」

私はぎよっとした。

「な、何でそんな言葉・・・」

ラビは首をすくめた。

「時々、サヤカの考えてることは聴こえる。でもサヤカはいつも難しいこと考えてて、聴こえてもよく分からない。」

話に聞いたことしかなかった本物のエスパーだ。

私は驚いたが、もう動じない。

何が起きても不思議でない人なのだと理解していたから。

やがて私達は病院のような真っ白なフロアに辿り着いた。

病室のような部屋のドアが等間隔に続いている。

その中の一つのドアの前で彼は立ち止まって、首から細いチェーンでぶら下げていたカードをスキャンした。

ドアが開いて、私達は外壁と同じ様に真っ白な部屋の中に入った。

そこにあるのは、真っ白なベッド、真っ白なテーブルと椅子、そして小さな本棚。

その本棚には彼のコレクションの絵本が並んでいた。

ラビは一冊の本を取って私に見せた。

それは古典的に有名な絵本、ピーターラビットだった。

ウサギの絵がかわいらしくて、私は思わず微笑んだ。

「サヤカ、その本はサヤカの前の先生がくれたんだ。次の先生に読んでもらえって。」

「私の前任者？」

そういえば、ラビと呼んでいたのも私の前にいた人だと、彼は言っていた。

その人はどうしているのだろう。

前任がいれば引継ぎがあつてしかるべきなのに。

私は本を開いた。

ラビはベッドに腰掛けた私の横に来て、絵本を覗き込んだ。

「……ピーターは好物のニンジンを食べようとして……。」

途中まで読んで私は気が付いた。

本の最後のページに誰かのメモ書きがある。

それは今はない私の祖国の文字、古代日本語だった。

ヒラガナくらいは日系人としての教養程度に読める。

私の鼓動が速くなった。

メモにはヒラガナでこう書かれていた。

すべてをしりたければでんわしろ　　ななよくよん　　はちごにによん
じえいど

「ジェイドは前の先生の名前。今はここにはいないみたい。」

また私の考えが聴こえてしまったのが、ラビが口を挟んだ。

「・・・いい先生だったのね？」

「ぼく好きだった。ラビって呼んだのは、ジェイド先生とサヤカ先生だけだし。」

少し寂しそうなラビの肩を、私は叩いた。

「大丈夫、生きてればいつかまた会えるよ。」

ラビは気弱な微笑みを見せた。

引継ぎも紹介もされなかった、前任者ジェイド。

この人に会わなければならないだろう。

私はそのメモ書きを、ケータイで写真に収めた。

第8話

「ねえ、今日はここに泊まってくれる？」

突然のラビの言葉に私はぎよつとした。

「泊まるのは無理よ。許可取ってないし。」

「ぼくが頼んでおく。ねえ、泊まっていつて。」

顔が近づき、赤い瞳が私を見つめている。

私の胸の鼓動が速くなった。

こんなにきれいな人に真っ直ぐ見つめられたら、誰でも変な気になるに違いない。

「ちよつ、ちよつと待って……。」

私は動揺しながら、腕で近づいてくる彼の体を押し戻した。

でも、彼はその倍の力で腕を押し戻し、私に近づいてくる。

突然、私の体が金縛りにあったように動かなくなった。

こ、これはもしかして……。

「ラビ、何かしてるでしょ？」

顔の筋肉は何とか動いたので、私はそれだけやっと言った。

ラビはそれに答える様に肩をすくめてニヤッと笑った。

否定はしないようだ。

「こ、こら！反則でしょ、こっこの。止めなさい！」

ラビは構わず、硬直している私を抱きしめた。

そのままベッドに押し倒す。

抱きしめられたまま、私はそれが全く不快なものでないことに自分でも驚いていた。

もしかすると私も心のどこかでこうなることを望んでいたかもしれない。

抗えない見えない力で私は抵抗もすることも出来ず、彼に抱かれるままにいた。

「サヤカ先生といると、何だか変な気持ちになってくるんだ。知らない人がぼくの中から呼んでいるみたいな・・・変な感じ。でも、嫌な感じじゃないんだ。」

ラビはベッドに押し倒された私を見下ろして言った。

銀色の髪がサラサラ落ちてくる。

赤い瞳は私を真っ直ぐに射抜き、目を逸らすこともできない。

吸血鬼というのに襲われたらきつとこんな感じなんだろう。

やがて彼の顔が私の胸元にゆっくり近づいてきた。

襟のボタンが突然、弾け飛んだ。

頭わになった私の胸の谷間に、彼の唇が触れる。

嫌ではなかった。

でも、こんなのフェアじゃない。

有り得ない未知の力で押さえ込まれる恐怖もあったのかもしれない。

気が付けば私の目から涙が溢れていた。

私の嗚咽に気付いたラビははっと我に返り、体を離れた。

途端、私の体の緊張が一気に緩み、神経が通うのを感じた。

体が自由になっても、私はベッドに仰向けになっただまま泣き続けた。

「い、ごめん。サヤカ先生。な、泣かないで・・・。」

ラビはおろおろして、私に触ろうか触るまいか迷っている手だけが

宙を彷徨っている。

私はベッドから起き上がった。

乱れた私の黒髪が顔にかかる。

私はそれをかきあげ、ラビを見た。

彼はビクツとして背筋を伸ばす。

「約束して。人の嫌がることに、力を使わないって。特に女の子には絶対こんな風に使っちゃダメ。」

私は、しゃくり上げながらそれだけ何とか言った。

「・・・分かった。ごめんなさい。もう、先生には使わないよ。」

しよげ返ったラビは、肩を落としてそう言った。

その姿はいたずらして叱られた子供のようだ。

彼の精神は、確かに子供なのに今しようとしたことはなんなのだろう・・・。

こっちが被害者なのに、すっかり元気をなくしたラビは私以上に落ち込んで黙っていた。

「そろそろ帰らなくちゃ。明日もヘルスチェックはやるからね。」

何を話しかけても今度は喋らなくなったラビに、私は立ち上がった。
言った。

スネた子供がだんまりを続けるのと全く同じだ。

こういう時は見放すに限る。

「やだ！待ってよ。」

予想通り、彼は飛び上がって、私に駆け寄った。

これも、想定内の子供の反応だ。

だが、一つ想定外だったことが起きた。

駆け寄ってきた彼がいきなり私を抱きしめ、キスをした。

見えない力ではない、彼の力で抱きすくめられながら、私は侵入してきた彼の舌を受け入れた。

息が止まりそうな勢いで彼は私の唇を貪る。

濃厚な仕草はとも子供のものとは思えない。

俺は子供じゃない！

突然、頭の中に声が直接響いてきた。

ヘッドフォンで音楽を聴くような、自分の頭の内部から聴こえてくるような、そんな声だ。

間違いなく、彼が私の頭に直接語りかけている。

これがテレパシーというもの？

あなたを抱きたい、サヤカ。俺を解放してくれ！

実際には音など聞こえないのに、その声は大音響で頭の中に響いている。

彼の激しいキスを受けながらも、ガンガン響いてくるその声で私は眩暈がしてその場に座り込んだ。

その途端に声がピタリと止んだ。

そこには呆然と立ち尽くすラビがいた。

「今の・・・誰？」

ラビは座り込んだままの私にぼんやり問いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7656n/>

Innocent RABBIT

2010年10月21日13時35分発行